

白山ふるさと文学賞

第八回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

母への気持ちと感謝

鳥越中学校三年

田中 たなか

倭人 やまと

僕は、昔から母との言い合いが多かった。でも、家族の中でも気が合うことも多かった。なぜかは僕もよくわからないが、ただ似ているのだと思う。今の僕が、昔の母に。それが母の気持ちだと思う。昔の自分と似ているから、つい言い過ぎる。自然だと思つた。

僕は小学校に入学した頃から、問題ばかり起こしていた。自分の中で思うようにいかない、すぐ周りにあたり、今思えば本当に問題児だったと思う。けれども、もともと僕の体が病弱だったためか、母はいつも優しく接してくれた。もちろん、本当に悪いことをすれば怒り、いけないことを教えてくれた。僕はそんな母が大好きだった。

僕には姉と弟がいるが、よくけんかもしたし、母の取り合いにもなつた。母は仕事で疲れていても、ずっと僕たちの相手をしてくれた。

僕が小学三年生のとき、母が骨折をした。足の骨が折れたのだ。母は家に帰つてこられなくなり、病院で過ごすのだと父が言った。当然、そのときの僕にはわかるはずもなく、ただひたすら泣いていた記憶がある。そんなことはあるはずもないのに、一生母が帰つてこなかったらどうしようと考えていた。

母が家に帰つてきたのは、骨折からしばらく後のことだった。そのときはともうれしかった。でも、手術の後というのもあって、母の体は疲労困憊していた。それなのに、僕は無理を言つて、一緒に遊ぼうと引つ張りまわした。その時の自分がどれだけ愚かで浅はかだったかは、もう少し後で知つた。

母のけがが治り、いつものように生活できるようになつても、僕は相変わらず問題児だった。学校では先生に怒られ、家では親に怒られていた。当時はもううんざりだった。なぜ怒られなければならないのか、まるでわかつていなかったのだ。簡単なことだ。今になってわかる。ただ自分が変わればよかつたのだ。それだけのことだった。僕にそれを教えてくれたのは、母だった。僕のことなのに、一緒に喜び、一緒に泣いてくれた。僕は本当に母に感謝している。

僕の病気は、母からの遺伝だ。自律神経失調症といい、気圧の変化などで頭痛、目まい、吐き気、だるさなど様々な症状を引き起こす。他にも、片耳の鼓膜が小さいときに破れて薄くなつており、小学三年生のときに、滲出性中耳炎になつている。病気のために、親だけでなく、学校にも迷惑をかけていた。辛くなると、決まつて母が話を聞いてくれた。

小学五年生のとき、僕はバスケを始めた。アルペンスキーもしていた。それでも、行きたくないと言つた。わがままに親を振り回していた。ある日、足に金属の破片が入つた。すぐに病院に行つたが、手術で取り除かなければ、運動できなくなると言われ、左足を手術した。初めての手術で不安も大きかつたが、母が手を取り、励ましてくれた。そのおかげで、何とか乗り切ることができた。その後は松葉杖で様子を見ることになつたが、そこで母の骨折の辛さがわかつた。片足の不便さや、無理をした時の恐怖。僕は、母に感謝してもしきれなかつた。ただ、母の偉大さに涙が止まらなかつたことを覚えていて。

僕は、これまでの人生で、母に救われたことがいくつもあつた。そして、これからも、受験や、新しい環境での生活の中で、母に救われることはたくさんあると思う。僕はこれまで母の存在があることで、とても安心できた。そして、母の存在は僕にがんばろうと思わせてくれた。今まで、そんな母に対して、暴言を吐いたこともあつた。これからも言つてしまうかもしれない。でも、もし仮にそんなことがあつても、これだけは心に留めておきたいと思つている。「母は世界に一人しかいない。これまでも、これから先も、決して代わりなどいない唯一の大切な存在である」ということを。

改めて、僕は母に感謝したい。生んでくれてありがとう。こんなに愛情を注いでくれて、ありがとう。母への気持ちを精一杯伝えたい。